# 久太漫評

# 久太漫評

## 久太の眞面目

岩佐作太郎

大杉の葬式を終へた直後、某氏方に立ちよると、某氏は頗る緊張したをもちで『大杉のかたきを誰れが打つだらう。敵を取るものがないやうでは、アナキストもへちまもあるものか』と、僕を詰じるやうに言つた。僕もそれには勘なからず面喰らつた。が、僕は『日本古來からの道徳では、不倶戴天など云つて、至上のものであつたが、今時、現在及び未來のために生命をなげ出すものがあらうと、過去のために生命を捨つるものはあるまい。』と云つて別れた。

越へて、大正十三年九月一日、和田君が福田大將を狙撃したと云ふ報に接した時、僕は思はず、『あゝしまつた!』と叫んだ。素より運動のためになげ出してある生命だ、何時、何所で、何う捨てるか分らない。だが、福田如き過去の老ひぼれと、未來ある久太との取り代へは、あまりに勿體なさ過ぎると、直感的に思はれたからだ。

生命をなげ出してことをする。已に、そのことそれ自身が非常に嚴肅なことだ。それを彼れ是れ云ふ奴は、生命をなげ出すことをせぬ奴か、又は毫末もそんなことを念頭に置いて居らぬ奴の、されごとであらう。深く戒めなくてはならぬ。

久太は云ふ『乞食のためにさへ、生命を捨てることもある。』大杉は彼れに取りては、またなき恩師だ。彼れが尊き運動のためになげ出した生命も、それがためには大切にして居れなかつたのだ。そこに、久太の面目が躍如とする。

だが、久太の眞面目は、死刑が無期となり、秋田に服役するに至り、娑婆の一風に當ることはあるまいと思はるる今日、その健康に注意し、智識を更らに研磨することを怠らぬところにある。之れ、眞に、吾れ人と共に學ばねばならぬところだ。——二月七日夜——

## 久さん漫評

山崎今朝彌

今手帳を見ると『久さん漫評』四百字三枚と書いてある。僕の付けた題だか課せられた題だか忘れたが、ツマリ僕もそんな事より外には書けない。

名が實を表はすものなら、久さんの久太ほど其の人に相應はしい親しみ易く與みし易い名はない。尤も久太であつたか久太郎であつたか知らないが、どうか久太であつてほしい、郎なんかは餘計のものだ。

久さんの事で判然覺へてる最初の事は、堺君の總選擧の時、本郷の演説會場で二階から選擧ビラをバラ撒いた事である。其時久さんが檢束されたかどうかは忘れたが、堺夫人が大將で久さんを檢束させまいと大いにカバつた事を記憶して居る。久さんが鍍山の監獄部屋から同志によつて救ひ出されて間もない時で、マダ堺君の處に隱れて居た時であつたかとも思ふ。

其後何時頃か久さんは堺君を離れて大杉君の畑へ行つた。浮浪人生活が性癖となつて居てキチンとした仕事に堪へられないと云ふのがホントの理由であつたと記憶する。でも堺君や夫人は非常に失望したらしかつた。元來が氣の合つた間柄であつたから。

久さんと仲の悪い人があつたろふか。久さんを嫌ひな人があつたろふか。久さんの悪口を云つた人があつたろふか。アナボル合戰の最中、ボルの人でも久さんの悪口は言はなかつた。俳人のように淡泊な、仙人のようにアッサリした坊主のように諦めのよい久さんが、仇討なんどとはヨク〳〵の事であつたとかしか思へない。

筆に口に、仕事に考へに、行くとして可ならざるなき久さんが、サテ何を仕出かしたろふと問はるれば、僕は一寸答に窮する。器用貧乏人寶、ツマリ久さんは堀の埋草ドブの捨石、此處が久さんの偉かつた處ではなかつたろふか。

體格上與みされ易い久さんは性格上默つて居られなかつたセイだろふか、久さん程警察でヒドイ目に會つた者はあるまい。巢鴨のアツブルスかナツポリスかの時計爭議の時など、兩手で兩足を持て身體を逆まにされ頭を床板にコツンコツンされたものである。それでも公判廷では平和の神樣がお伽噺を判事にしてるようなものだつた。

最後であつた今度の仇討裁判に於ける久さんの——久さんばかりではないが——友情振りを考へると涙が出る。

久さんの云つた言葉の中一番僕の耳に殘つてるのは却つて以前の裁判に、社會主義も無政府共産主義まで行かなくては駄目だと云つた答と、反抗心からなら荷車にタンを吐く事さへ意義があると云つた事だ。

今でも惜しかつたと思ふのは控訴してもつと輕くして置きたかつた事。後で氣が付いたのは、大杉事件に關係ある最上長官は誰かと聞きに來た時の事。

——恩赦のあつた日——

## やさしい一面

山鹿泰治

久さんが今度減刑されて有期になつたのは嬉しい。しかし、一卑怯漢を討ちそこなつた償としては到底忍び得ない犧牲だ。

村木君が重態に陷り、皆なで市谷の監房から擔ぎ出した時『頼むぞ！』と言つた悲痛な聲や、刑が定まつて面會所で、古田君が殺されるのを近くで見てゐる事は實に心苦しいと言つて面を曇らせた彼れの姿は、深く僕の記憶に刻まれて居る。

僕が大正十年に出獄して、京都の山科村の森の中の小屋に住んで居た頃、久さんは關西へ來る毎に立寄つてくれた。夜中に硝子戸を叩くのはキツト彼れだつた。或る大嵐の夜、僕は出先きで泊つた。その留守に傘なしでビショぬれになつてやつて來た。妻が一人でゐたので遠慮して何んと言つても上らず、傘を借りて又、黒闇の山道を三里も歩いて他の家で泊つた。こんな義理固い田舍の爺さんの樣な半面があつた。

その後僕が東京へ來て本郷に居た時、一人で晝寢をして居て、目が醒めたら枕元に那須溫泉の土産の菓子鉢が置いてあつた。後で久さんに逢つたら、さつき行つたが內中留守で、誰れか見知らない男が寢てゐたから默つて置いて來たんだ。顏を見たが君らしくなかつたから起さなかつたんだ、と言つた。それほど遠慮深い男が、社會的不正の前には大膽無比な行動を敢行する。古田君や、村木君のやさしい心も全くこれと同じだ。バクニンにも、大杉にも、クロにも此の樣な半面を見る。眞の革命家としての人格には、理窟と行動の中に織込まれた美妙な感情が無かつたら、遂に破壞の道具に過ぎなくなるんだ。

## 思ひ出すままに

古河三樹松

たしか震災前の夏もまだ初めの頃だつた。或る晩の會合で大分人數が揃つた時分、絽の羽織に角刈頭の小さな男が、ニコ〳〵と眼鏡を光らせて這入つて來た。その頃の主義者といふと大がい、長髪にルバシカ、着物の上にレインコート等を羽織の樣に着込んでゐたもので、まだ新米の僕は世間並に、やはり主義者の服裝はそんなものと思ひ込んでゐたし、その夜の連中も餘り滿足な身裝は少なかつたから、殊更に感じたのだらうが『何んだかシヤレた男だなア』と思つてゐると、皆なが『久さん々々』と呼んでゐるので、さてはこれがよく聞く和田久太郎だな、と稍や意外に感じた。尤も今になつて見ると、その當時の久

さんは那須から歸りたてで、一世一代の戀に陷つてゐたのだから、僕が驚くほど粋な容姿だつたのも無理はない。

忘れ難い九月も過ぎて逝く秋の冷い朝、僕達は同志武良二君の出獄を中野監獄前に待ち受けた。久さんは『ただ民衆よ迷羊よ、炎となりて地を燒けよ……』とあの歌を怒鳴り乍ら、黒鐵の嚴しい門をきつと睨んでゐたが、その時きつと久さんの心は權力に對する反抗に烈しく燃えてゐたに違ひない。

久さんが捕まる少し前だつた。勞運の傍のお湯へ皆なで出かけた事がある。素ばだかの久さんは、腹や腰の邊が恐ろしく汚い、まるで蟇の脊中みたいに茶褐色の斑點模樣が一面にある。『これは那須溫泉の土産だよ』かう云ひ乍ら、久さんは涼しい顏をした。その時、誰かが、死んだ源兄や久さんや僕を顧み乍ら『三人とも小さいのが揃つてゐるね』と、冷やかすと『その代り質に於て優つてゐらあ』と久さんは源兄と顏を見合せて笑つた。

市ケ谷で初めての面會に、あの隔ての扉が、ガタリと上がると、硝子越しにあご鬚モヂヤ〳〵の久さんが、元龜天正時代の豪傑みたいな顏してニヤリ〳〵と笑ひ乍ら、僕が何かものを云ふ度びに『ウン、そうか』と首を強く動かして力強く受け答へしたのを、今でもよく覺えてゐる。

それから久さんの强情我慢は有名だが、何日だつたか何とか署へフン捕つた時の有樣を話しながら『床の上へ兩足を持つて逆さにして、頭で餅をつきやがつた』と他人の事の樣に輕く鼻の先で笑つてゐた。又、議論も好きで、久さんが吉祥寺にゐた頃、四五人で押しかけたら、ビールか何かで少し醉つてゐたらしいが、二階の自室へ連れ込んで盛んに組合運動に關して、皆に議論を吹つかけたりした。

絽の羽織の粋な久さんは、又一面、着物の上へ脊廣の上衣を無雜作に引つかけたりして、隨分無頓着なズボラな點もあつたやうだ。

幾度も自殺をやりかけては失敗した久さんは、無期が辛くて自殺したと云はれてはタソ癪だから、どんな事があつても死なぬと、今、身を持つて僕達に根强く頑張れと敎へてゐる。

## 彼の自己嘲笑

堺　利　彦

私は人の笑ふ顏を見ることが好きです。自然なほゝゑみも好き、我を忘れた高笑ひも好きだが、殊に自分の弱點や失策を客觀した時の、嘲笑、憫笑、苦笑と云つたようなものが最も好きです。

私が今、久さんのことを思うてゐると、先づ彼の笑ひ顏が現はれて來るのが嬉しい。彼は頭を五分刈にしてる。頬から顎にかけて薄い髭が少しのびてる。そして幾らか目尻をさがり加減にして、ニコ〳〵若しくはニヤ〳〵笑つてる。そこに彼の、人のよさが見える。彼の意地張、彼の戰鬪力、彼のまじめ、彼のいきどほり、そんな色々な彼の長所よりも、彼の友人たる私に取つては、只だ彼の人のよさが嬉しいのです。

然し、そんな只のニコ〳〵や、ニヤ〳〵よりも、彼の自ら嘲る一種特別の笑ひ方には、實に何とも云はれぬ味ひがある。そんな時、彼はよく頭をかく。或は兩手で頭をおさへる。彼の顏は少し赤味を帶びて來る。如何にもウイ〳〵しく、はにかんで見える。初はうつむいたニガ笑ひか、クツ〳〵笑ひだが、後にはソツ方を向いた、或は相手の顏を見つめた、ハツ、ハツ、ハツといふ、吐きだすような高笑ひになる。自分を冷笑し、自分を罵倒し、自分を滑稽化するところに、久太の久太たる眞面目が遺憾なく發揮される。

私はそうした和田君の笑ひの中に、明らかに其の善性美質を認めて、それを懷かしむの情に堪へないのです。

# 名づけ親の久太

望月桂

曾つて山川均君の倅に、振つた作品だと云ふので『振作』と命名したのは久さんだ。それから中名生の息子には『芋作』と名づけたが、二度ある事は三度とやら、俺の處でも昨年暮に迫つて、益々腹もせり出すので、鬼が出るか蛇が出るか、何はともあれ飛び出されたら、番號代り符牒代りに、何んとか名をつけずばなるまいと云ふので、秋田の鐵窓へ相談を一つ持ち込んだのだ。

ところが久太、唇を噛み頭をしつかと抱へ込んで捻り出した事だらう。返事に曰く、

『よろしい、よろしい、……若し男なら、おふくの子供だからひよつとこ……ではちと可哀さうだな……「空美」はどうだ。「あきよし」とでもこぢつけて讀ませればよい。そしてもし女だつたら……やつぱり「空美」さ。女らしく「うつみ」とでも讀ませればいゝぢやないか。別に意味はない。僕は「空の色」が好きだからだ。』

と來た。そこで俺も、繰返し〳〵讀んだ。「あきよし」「うつみ」……いゝ名だ〳〵。だが待てよ。「空店」の空、「空蟬」の空か。ブッと吹き出したね。彼れ和歌俳句をよくす、また禪三昧に入るよし、萬葉調だ、抹香の香だ、また奴、獄窓に最上唯一の美を空に選ぶも理なり。だが、娑婆の人の子の名だぞと。

俺は又も繰返して見た。そして、とうとう飛び出すまで決まらなかつた。しかし、出ると同時に解決した　それは丁度冬の澄みきつた明月が分娩室に差し込んだので、頭の空つぽの字を、明晰の明の字に取り替へ「明美」と呼んだがどうぢやと、早速名づけ親まで恐る〳〵伺ひをたてると、

『名前の頭が空じや頭が空つぽのやうで……』とは御尤も千萬、實は、僕は近頃禪の本をかぢるものだから、空といふ字に却つて興味を感じてゐたのであつたが、成る程、からつぽと取つちや嫌やだらうて。ハツハツハツ。「明美」は上等だ。殊に、いい月が出てゐたから思ひついて……とは氣に入つた。賛成、賛成。』

と許可があつた。かうして見ると、俺はやはり娑婆の俗衣を脫ぐことが出來ぬのに、久さんは獄裡に禪僧のやうに自若たるものか。

# 一錢の借金

望月福子

茶とも黒とも見分けのつかないお釜帽子を、無雜作にちよこんと阿彌陀にかぶり、ハッピに草鞋がけといふ土方風體の客が、御飯をたべに來たのは、丁度十一年前、一膳めし屋『へちま』の終末をつげる或る日の晝頃であつた。

客は默つて御飯を食べて、勘定を拂はれたが、そのお釣錢の一錢があいにくないので、客を待たせて濟まぬとは思ひながら、一生懸命、火鉢の引出しやらあちらこちらとさがし廻つて見たが、どうしても一錢のお金がなかつた。どうしたらよいかと、ちよつと思案に餘つて考へ込んでゐると、突然『一錢、ようござんすよ。僕、望月君知つてゐますから』と、今まで默つてぢつとして、見詰めたまゝ待つてゐた客が口をきいた。

私は立ちん坊の樣なこの客を見直した。望月を知つてゐる？　どうしてこんな風をした人を知つてゐるのだらう？　と思ひながら『何方でございませう』と云ふと、『僕、和田といふ者です。歸られたらよろしく云つて下さい』と云ひながら出て行つてしまつた。

身なりはきたないが、どこか澄んだ奇麗な聲の人だつた、などと思ひながらタ方望月の歸るのを待つて、すぐ晝の客の話しをすると、『あれが足尾銅山から逃れて來た和田久太郎といふのだよ』と云ひ聞かされた。

これが、久さんと私との初對面であつて、そして、その時の一錢はいまだに

借りになつてゐるのだ。が、その後はさて、改つて返さうとも返へせとも云へぬ、親しいお友達になつたので、遂にこの一錢は永遠の借金になるのでせう。

## 久さんの半面

中村しげ子

震災直後の事だつた。四十日餘の留置場生活から出た私達は、心配してくれた田舎の親達の顏を見ながら、暫く國へ行つて靜養して見やうと云ふ事になつた。で、時節柄空家にして置く事も不安なので、誰かに留守居番を賴んで行き度いと思つたが、あいにくと皆チリ〳〵バラ〳〵になつた揚句なので、誰もなかつた。

と或る日のこと、久さんがブラ〳〵やつて來て、『どうだい。俺が留守居番をしてやらうか。』と云はれたが、こつちは久さんの留守居番はてんで頭になかつた。と云ふのは、今迄の久さんの筆法は、餘りに落着かないこと、五日とヂツトしてゐられる樣な人ぢやない。どんなに傍の者が、忙しくテンテコ舞ひをしてゐる場合でも、厭になるとさつさと自分の仕事を放り出して、どつかへ消えて了ふと云ふなまけやの久さんだつたから。こんな譯でからつぽの家へ來て、一人で自炊なんて面倒臭い事は到底久さんに出來るものぢやない、こん度も三日坊主だらう、なんて考へたが、とにかく任かせて出掛ける事になつた。

國へ行つてからも、『久さんの事だ、きつと、もうそろ〳〵飽きが來て、どこかへ出掛けた頃かな』とか、『ズボラのズボ久だ、掃除なんかするものか、布團は万年床』などと兄貴もいいかげん惡口を云つたものだつた。ところが五日目に『今日から一日一信をする事にしよう』と云ふはがきが舞ひ込み、それから一ケ月の間は、毎日かゝさず、はがき或は手紙が配達される、時には畫が描いたりしてあると云ふ、凄い根氣を見せた。

やがて田舎を引上げる事になり、定めし、家は壁が落ち、障子は破れ、しかも久さんの留守居番ぢや、ほこりの山だらうと歸つて見ると、意外、家の中はそれこそちり一つなく、壁の落ちた所は、隅から隅まで繕ひ、所々に畫など張られてある。障子はすつかり新しく張りかへられて、引手の所に可愛いゝもみぢや草花が散らされてある。なまけ者、無性ものとのみ思つてゐた久さん、家庭の暖かさなどは本當に知らなかつたらしく、年中流浪に近い生活をして來、又これからも、そうした生活にひたつて行く人らしかつた久さんの半面に、こんな落附いた生活をシミ〴〵味はおうとする氣持、綺麗好きな性分、又あのいつもたがのゆるんだ樣な中にも斷乎たる決斷の決心を持つ、斯うした、久さんであらうとは全く夢にも考へ及ばなかつた。

その時壁に張つた畫があたりの壁や唐紙とのいゝ調子を持つて、久さんの藝術的な仕ぐさが、そのまゝホーフツたるもので、久さんは常に私共の家庭にある親しさを感ずる。

## 秋田の久をぢさん

望月公子

さいばんしよで、自動車から、あみがさかぶつておりた久をぢさん。古田の兄さんと、新谷さんと、倉知さんと四人で、さいばんしよの中でおもちやのピストルを見せられたとき、お話してゐましたね。

そのとき、あたいのところを笑つて見てゐたね。キヤラメルを食べてたからほしかつたらう。

久バカ、かんしゆさんが知らないときに、白いちようちよになつて、いらつしやい。きゆうりを食べさせてあげませう。

久バカ、ひげ出來た。

赤いレンガのまどから顏だした。

頭はモヂヤ〳〵、

早く出て來い、しつけい！

## 久さんへ

大杉マコ

久さんと最後にあつた時から、もう二年になりますね。久さんのことは大がい忘れたけれど、久さんは、よく手をうしろへまはして頭をかく癖だけ一つおぼへてゐます。

惡いでせう、あの監獄であつた時、何にか言ほうかと思つたけれど、口がつぐんで何にも言へなかつたので。ごめんなさい。私も、久さんみたいに、童謠がうまいのよ。それでは一つ聞いててふだいね。

つばき
つばきさくや　庭の木に
すゝめもとぶや　庭の木に
つばきさくや　紅つばき
あちらの木には　白つばき
みんなそろつて　眞つさかり

どうです、久さん。うまいでせう。あなたは牢屋の窓に白い蝶と黄色な蝶と來ると言つたけれど、つまりそれは私と公ちやんと思つててふだいな。おたつしやで。しつれい。

## 戀と死と生

江口渙

和田君が獄中から私へ宛てた手紙の中に『堀口の事をほんとうに解つてくれてゐるのは君だけだ』と云ふ意味の一節のある事を、讀者は發見するだらう。私はその事についてこゝへ紙數の許す限り詳しく書き止めてをきたい。それは和田君のためにも、亦、慘憺たる死方をした彼女、堀口直江のためにも。

私と和田君とは大正十二年の二月から五月まで那須溫泉の小松屋で一緒に暮した。元湯と云ふ熱湯へ入つて體を直すためだつた。その元湯で久さんは始めて堀口直江を知つたのである。

彼女は淺草の十二階下で體を賣つてゐた女である。先づ彼女の方から先へ久さんに愛をぶつつけた。そして、それに久さんが動かされのだ。だが、何時の間にかどつちがどつちとも云へない程、熱烈な火でもつて互の心を包むに到つたのだ。

それは三十歳の久さんにとつて、まことに驚く可き初戀だつた。それまで女を、戀愛を、結婚を、輕蔑し、否定し續けて來た久さんは、彼女に依つて生れて始めて女の價値を、戀愛の力强さを知つたのである。そして、東京へ歸つた後六月から八月頃までか、千束町邊へ間借をして、絶えず彼女と往來をしてゐたらしい。久さんに云はすと、彼女はとてもあばすれの、莫連者の、恰度、講談へ出て來る毒婦のやうな女だ。そして、そこがひどく氣に入つたのだと云ふのだ。だが、私に云はせると、それは久さんの買被りだつた。成程さう云ふ半面もたしかにあつた。然し他の半面にはとても善良な、非常に思ひ遣りの深い不思議な溫味を持つてゐた女だ。私は彼女に依つて倫落の女のさうした美しい半面を知つて嬉しかつた。

こゝまでは至極平凡だ。だが、震災と同時に事件はぐるりと變つた。永らく生死不明だつた彼女の消息を私が偶然知つたのは、十三年の春だつた。だが、その時には震災のために鄉里である埼玉縣の妻沼へ逃げ歸つてゐた彼女が、父と繼母と腹違ひの兄弟達の殘忍な酷遇に生命がけで反抗しながら、然かも病苦のためにまさに死なうとしてゐたのだつた。

私からその事を聞いた久さんは、早速、妻沼へ出懸けて行つた。そして、言葉を盡して上京と入院とをすゝめた。だが、彼女は敢然と退けた『こゝでこの

ま、死んでやるんだ』と云つて。そして、呪ふ可きその家庭悪に死をもつて闘ひながら、間もなく死んで終つた。

又となき愛人が眼の前に見せたこの悲痛悲壮な反逆心は、どれだけ深刻に久さんの心を打つたか解らない。だが、久さんは一時世間へ流布されたやうに、彼女の死んだために絶望的になつたのでは斷じてない。却つて、その死に依つて、人間は如何に生き如何に死す可きかをはつきり感じさせられたのだ。それがその後の久さんにどんな強い影響を與へたかは今更説く必要もないだらう。

——二月二十二日——

## 編輯後記

和田君がまだ市ケ谷の未決監にゐた頃、同君と本書の出版を約束したのだつたが、『大杉榮全集』の編輯や、雑誌『勞働運動』の復活のために忙しかつたので、つい延び〳〵になつてしまつた。和田君が無期懲役囚として秋田へ送られてから一年半近くも經つた今日、やうやく此の編輯を終へて、兎も角も一種の安堵を感じてゐる。

本書は大體、和田君の希望に基いて編輯したのだが、詳しい打ち合せをすることが出來なかつたので、僕が勝手にやつてしまつたところも尠なくない。殊に書簡の取捨選擇は、全然僕の獨斷である。しかし僕は、本書に於いて、久太といふ多角的な人間の各方面を、可なり充分に現はし得たと信じてゐる。いや、これほど著者自身を完全に曝らけ出した著書は恐らくは他にあるまい、といふ程の己惚れをさへ感じてゐる。

殊に僕は、本書に收めた書簡が、最も露骨に久太そのものを投げ出してゐると思ふ。望月禰子さんに宛てたしんみりしたもの、同志に宛てた運動上の眞實な注意警告、それから彌次、皮肉、與太、フ、フンと鼻先きで笑つたところ、何れも久太の一面である。

和田君が市ケ谷で書いたものは、このほかにもまだ澤山ある。「僕と禪」、「嚴肅なる感傷」、「旅と風呂」、「大杉といふ人間」、「和田久太郎略歴」、及び「思ひ出の記」の一部、等はその主なものである。しかし、これ等は、和田君の希望によつて本書に收めなかつた。

口繪にした望月君の「久太の像」及び久太の筆跡「蠅よ跳れ……」は、何れも和田君の注文によつたのである。

「久太漫評」は都合二十五人の人に書いて貰ふよう、和田君から指名して來たのだつたが、紙面の都合もあるので、望月君と相談の結果、その中から以上の人を選んだ。勝手な處置だつたが御勘辨を願ひたい。

終りに、和田君の健康を祈り、久太漫評をお書き下さつた諸君、及び手紙を貸して下さつた各位に、厚く御禮申上げる。

一月二十五日　　近藤憲二

# 獄中の俳人

## 「獄窓から」を読んで

芥川龍之介

僕は和田久太郎君に会つたことはない。又社会運動家としての君のこともごくぼんやりとしか知つてゐない。かういふ君を論ずるのは、僕のほかに人も多いであらう。僕はただ和田君の雑筆や俳句や歌を集めた「獄窓から」といふ本を読み、この本のうちに現れた君のことをちよっと紹介したいのである。

和田君はその書簡の中に（堺利彦宛・八月十九日）かういふことを書いてゐる。

先達つて読んだ、玄耳庵支那叢書「興亡」の中の、徽宗帝最期の場面の処に、『この地方（均州）は、死人があれば必ず屍を火でたき、半焼きになつた頃、定りの石坑の中へ投げ込んで置く。そして置いて、その穴の中の水で燈油を製する。』……これを読んでフト思ひ出したのは、先年欧洲戦争の最中に、ドイツ軍が死体から油をとるといふ事が日本の思想界に憤慨を起させて、『悪魔の所業だ!!』『人道の敵だ!!』と、やかましく論ぜられたことです。そして貴君と高畠素之君とは、それ等の人々の、エセ人道主義を嘲笑つて『流石にドイツだ!!徹底してゐて面白い。戦争で生きた人間を平気で殺す人道主義者が、死体から油をとるのを悪魔といふんだから滑稽だ!!』と大いに皮肉られた、あの事をです。……処で、こんどこの本を読みながら僕のフト感じた事は『支那人といふ奴は、随分惨酷なことを平気でやるものだナー』といふにあつたのです。……だが、理性は、それを決して悪いことだとは考へないのです。けれども、その理性にそむくセンチメンタルな気持があつて、『惨酷だ!!』と叫ぶんです。……

○

和田久太郎君は、この書簡の中に、君の心臓を現してゐる。しかも社会運動家でも何でもないわれわれに近い心臓をあらはしてゐる。僕はこゝに理性の力を云々しようとは思つてゐない。又和田君の心臓を云々しようとも思つてゐない。たゞこの心臓の持ち主は、同時にまた唯物主義的に鋭い頭脳の持ち主だつた。これは勿論和田君には悲劇的な矛盾である。しかし同時代に生れ合はせたわれわれに共通する矛盾である。和田君はこの矛盾を持つてゐるために必ずしも大を加へないかも知れない。けれどもとにかくわれわれには少からず親しみを加へるのである。

○

和田君は前にもいつたように、俳句や歌を作つてゐる。しかし巧拙といふ上では歌は到底俳句に如かない。それは「句作のおもひ出」の教へるやうに、十三の歳から句作してゐた和田君には当然といはなければならぬ。和田君はあのしぶとかつた俳諧寺一茶を愛してゐる。が、君の俳句はどれを見ても一茶のやうに辛辣ではない。その代りに一茶よりもやさしみを持つてゐる。（僕は「獄窓から」の中にある俳句だけは残らず読んでしまつた。）君の獄中の生活は、成程君の俳句の中にも暗い影を投げてゐるのであらう。実際又『くびれくびれ南京虫の食ひかす』などといふ作は悲愴であるのに違ひない。けれどもそこにさへ感ぜられるものは一茶の図太さには遠いものである。

○

和田久太郎君は恐らくは君の俳句の巧拙など念頭に置いてはゐないであらう。僕もまた、獄中にゐる君の前に俳談をする勇気のないものである。しかし君の俳句は、幸か不幸か僕を動かさずには措かなかつた。僕は前にもいつたやうに、何も和田君のことは知つてゐない。けれども僕は「獄窓から」を読み、遠い秋田の刑務所の中にも天下の一俳人のゐることを知つた。

のどの中へ薬塗るなり雲の峰

五月雨やあか重りする獄の本

麦飯の虫ふえにけり土用雲

しんかんとしたりやなのみのはねる音

かういふ俳句を作るものは和田君の外にはないであらう。僕は或は和田君にかういふ俳句を作ることも排悶のためかと思つてゐる。しかし君の才力や修練は『排悶のため』を超越してゐる。僕は「獄窓から」を前にしたまま、一気にこの短い文章を草した。これもまたわれわれ『怠惰なる日の怠惰なる詩人』たちにはやはり排悶のためになるからである。（本郷駒込片町十五労働社発行、定価一円五十銭）　東京日々新聞切抜

# あとがき

大島英三郎

大正十二年の関東大震災を好機として国家権力は大杉栄ら革命運動者と不遇の朝鮮の兄弟姉妹らを大虐殺しました。これは太平洋戦争（天皇の名による強盗殺人強かん等の大罪悪）の序曲でありました。

これに反逆し、これを防止し、人民の福祉を守ろうとした和田久太郎、吉田大次郎らギロチン社の人々は、今、私たちに何を訴えているでしょう。

無謀な太平洋戦争に失敗した権力者資本家は、議会制民主主義の仮面と偽善で大衆を支配し搾取しいわゆる経済大国にのし上がりましたが、人類の生存をおびやかす公害、国家の暴力機関である自衛隊の肥大化、重税、人民の住宅難、過密都市と過疎の農山村等、社会生活の廃滅を予見されるのみでアナキストの革命の警鐘を乱打の時となりました。

私が今、金銭的窮迫の中から本書を出版するのは、戦い倒れた和田久さんを諸君の坐右に送り、諸君の心の中に再生させるためです。なお本書出版について近藤真柄、望月桂さんら多数の人々のご高配をいただいたのを感謝いたします。（七一・七・一九）


昭和二年三月六日印刷
昭和二年三月十日發行

【定價壹圓五拾錢】

獄窓から

著者　和田久太郎
編纂發行兼印刷者　東京市本郷區駒込片町十五　近藤憲二
印刷所　東京市神田區今川小路一ノ一　同工社

發行所　東京市本郷區駒込片町十五　勞働運動社　振替東京五一三六〇番

昭和五年十一月十日印刷
昭和五年十一月十五日發行

改造社

改造文庫　第二部　第百六十二編
獄窓から　定價五十錢

著者　和田久太郎
編者　近藤憲二
發行者　東京市芝區愛宕下町四ノ四〇　山本三生
印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　君島潔

（兩角製本）

共同印刷株式會社

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地　改造社　振替口座東京八四〇二番　電話芝(34)自一一二一番至一一二四番

革命の歌

ああ革命は近づけり、ああ革命は近づけり。
起てよ、働く家の人、目ざめよ兄弟姉妹たち。
見よ、わが自由の楽園を、じゅうりんしたるは何者ぞ。
見よ、わが正義と人道を壊滅したるは何やつぞ。
支配と搾取、迫害に、われらいつまで屈せんや。わが脈々の熱血はあくまで自由を要求す。
われらに自由なからずば、むしろ墳墓を選ばんと、わが同胞は万国に、闘争しつつあらざるか。
春らんまんの花さえも、権力者どものために咲き、秋れいろうの月さえも、資本家地主のために照る。
わが同胞は戦争に、彼らのために殺されき。老いたる人はいたましく、彼らのために死に去りぬ、若き人らの青春も彼らのために奪われる。
ああ長年のこの怨み、いかで報いで止むべきや。われらは少く弱けれど、自由連合の力あり。
ああ起て、君よ、革命は、われらの前に近づきぬ。農夫はスキ・クワ取って起て、工夫はツルハシ取って起て。
女工は道具を取って起て、学徒は棒を取って起て、森も林も武装せよ。石は何ゆえ飛ばざるか。マイトは何を爆破する。
われらの熱血くだっては、やがて染めなす黒色旗、高くかかげて決起せよ。
ああ革命は近づけり、ああ革命は近づけり。
起てよ、働く家の人、目ざめよ兄弟姉妹たち。

# 黒色戦線社発行パンフレット

八太舟三著
純正無政府主義　一五〇円
階級闘争説の誤謬　一三〇円

マラテスタ著
無政府主義組織論　一〇〇円
選挙戦に際して　―付略伝―　一五〇円
農民の中へ　二〇〇円

石川三四郎著
農民運動　一五〇円

ペテルロー著／山鹿泰治訳
平民の鐘　―無政府の福音―　一五〇円

岩佐作太郎著
無政府主義者はこう答える　一五〇円

石川三四郎ほか三氏著
日本無政府主義運動史　三五〇円

朴烈ほか十一氏著
反逆者の牢獄手記　二〇〇円

八太舟三遺稿集
無政府共産主義　―人類解放の道―　七〇〇円
死刑囚の思い出　―増補決定版―　七〇〇円
古田大次郎著

（近刊）
倫理学　―その起源と発達―　クロポトキン著
付　無政府主義の道徳　八太舟三訳
天皇制破壊の渦動
―一・二皇居発煙筒事件・訴証記録―
埴谷雄高氏の天皇制批判の証言収載

獄窓から
和田久太郎著
近藤憲二編
黒色戦線社補
￥800

発行日　1971年9月1日
―関東大震災記念日―
（著者が福田陸軍大将を狙撃し捕われた日）
発行所　黒色戦線社
群馬県伊勢崎市中町和田
振替　宇都宮 11015
大島英三郎
発売元　ウニタ書舗
東京都千代田区
神田神保町1の52
電話(03)291―5533
印刷所　バルカン社
東京・新宿・東大久保1-464
電話（354）1039